

エルドローティ先生は信じている。⁽⁹⁾

と。イタリア・シオニズムのイデオログは、弁護士のアルフォンソ・パチフィチであったが、きわめて敬虔だったパチフィチは、イタリア・シオニズムが世界各地のシオニズム運動支部の中でも最も宗教的な支部であると請け合った。一九三二年のやはりインタヴュー記の中で、パチフィチは、

新しい条件がイタリア・ユダヤ人の再生をもたらすという確信を表明した。まさにパチフィチは、ファシズムがイタリア政体の生存法則になるか以前の段階で、ファシズムの精神的傾向と同根のユダヤ主義の哲学を自分が進化させていた、と主張した。⁽¹⁰⁾

ムッソリーニとヒトラーの関係確立

ムッソリーニが同情を寄せるまでは少なくともためらっていてその後反応したシオニストとは異なり、ヒトラーのほうはそんな抑制的態度は見せなかった。ファシストの政権掌握のはじめからヒトラーはムッソリーニの事例を、テロル独裁こそが弱体なブルジョア民主主義を転覆でき、また労働運動の排除開始を可能にさせる証明として利用した。ヒトラーが権力を握ると、ムッソリーニに負っていたものを、一九三三年三月のイタリア大使との会談のなかで、つぎのように認めていた。「大使閣下は、私がムッソリーニ大統領に対しどんなに大きな賛嘆の念を抱いているかわかりただけだと思います。もしイタリアでドゥーチエ（総統）が権力掌握に成功されていなければ、国民社会主義（ナチズム）もドイツで皆無に等しいくらいチャンスがなかったでしょうから、ムッソリーニ大統領を我が〈運動〉の精神的頭（かしら）とも思っています。⁽¹¹⁾」

ヒトラーがファシズムにけちをつけていた点も二つあった。一つはイタリアがヴェルサイユ条約で獲得した南チロルのドイツ人を容赦なく抑圧していた点。もう一つは、ユダヤ人のファシスタ党入党を歓迎していた点であった。しかしヒトラーは、その二つの問題がどんな解決を欲しているかがきわめて似ており、したがって最終的にはひとつのものになるときわめて正鵠をえた見方をしていった。チロルの人びとをめぐるイタリアとの争いはユダヤ人を利するだけだとヒトラーは主張していた。したがってドイツのほとんど右翼とは異なり、ヒトラーはつねにすすんでチロルのドイツ系住民を見捨てた。⁽¹²⁾ さらにヒトラーは、ムッソリーニの初期の反セム主義的言明について一九二六年の「わが闘争」の中では気づいていなかったにもかかわらず、このイタリア人が心の底では反セム主義者であると強調した。

ファシスト・イタリアが遂行している闘争は、結局無意識裡に（私個人は無意識とは信じられないが）ユダヤ人の三つの主要な武器に対する闘争を遂行しているけれども、この超国家権力（ユダヤ）の毒牙は剥がしとられつつある。国際マルクス主義の持続的破壊だけでなく、またフリーメイソンの秘密組織の禁止、超国家的報道機関の追及、逆にファシズム国家構想の漸進強化によって、ここ数年のうちにはイタリア政府は、ユダヤという世界規模のヒドラの牙擦音を気にすることなくますますイタリア国民の利益に役立つようになる。⁽¹³⁾

しかしヒトラーが親ムッソリーニであつても、そこからムッソリーニのほうも親ヒトラーであるという

ことにはならなかった。一九二〇年代を通じて「ファシズムは輸出商品ではない」とドゥーチエ（ムツソリーニ）は、繰り返し続けた。一九二三年のビヤホール一揆が失敗し、一九二四年の国会選挙でナチの得票率が六・五パーセントと貧弱な結果におわつた後、ヒトラーが代表できるものとはなくなつていゝ。ムツソリーニがこのドイツのファシズムに重大な関心を向けるようになるには、大恐慌と選挙におけるヒトラーの突然の勝利が必要であつた。今やムツソリーニは一〇年もすればファシズムにヨーロッパが染めあげられると語りはじめ、彼の報道機関も好んでナチズムの報告をし始めた。しかし同時にムツソリーニはヒトラーの北方人種的レイシズム（ゲルマン人種優越論）と反セム主義を拒否した。ムツソリーニの親シオニズムには全くまごついたシオニストも、ヒトラーが権力の座に到達したらムツソリーニがヒトラーを鎮静化させる影響力を発揮してくれるものと期待するようになった。¹⁵ ローマ進軍一〇周年の一九三二年一〇月、パチフィチはローマの真のファシズムとベルリンの代用品との違いを熱く語つた。

ほんとうの真正ファシズムはイタリア・ファシズムと、他の国の疑似ファシズム運動とは根本的に違つてゐる。後者はしばしば最も反動的なたぐいの病的恐怖感を利用し、なかでもユダヤ人に対する盲目的、拘束のきかない憎悪を、大衆をしてその真の問題、その悲惨な境遇、それをもたらしつゝの真の元凶から眼をそらさせる手段として利用する。¹⁶

後に、ホロコーストのあと、ヴァイツマンは自伝『試行錯誤』の中で、イタリア・シオニストの反ファシズム性を確証する証拠を何とか示そうと無益な努力をしている。「シオニスト、そしてイタリア・ユダヤ人全体も、ファシズムについて声高に見解を表明してはいるが、反ファシズムで知られてゐた」と。¹⁶

ムツソリーニの反セム主義的言動だけでなくファシスト初期の反シオニズムを考慮に入れるとシオニストは一九二二年にはまづムツソリーニの肩をもつことはできなかつた。しかし、これまで見てきたとおり、いつたムツソリーニが反セム主義の態度をとらないと請け合つと、この新しい権力にシオニストは忠誠を誓つた。体制初期にムツソリーニがシオニストの国際組織に憤慨している、とはわかつていたが、シオニストは反ファシズムにはならなかつた。一九二七年、ソコロフやサチェルドーティによる声明が出された後では、シオニストがただムツソリーニのよき盟友であつたとしか解しえないというのがたしかなところなのである。